

## ドイツ語標準発音とハレ大学の発音辞典 — 音声・音韻記述の通時的考察 —

高橋希衣

### 0. はじめに

本稿の目的は、ハレ大学 (Martin-Luther-Universität-Halle-Wittenberg) でこれまで出版されてきた、そして現在出版されているドイツ語の発音辞典 (Aussprachewörterbuch) における標準発音 (Standardaussprache) に関する記述を通時的に考察することである。またもう1つのドイツを代表する発音辞典である *Duden 6* や各先行研究との比較を行い、ハレ大学による発音辞典が持つ特長や問題点を明瞭にし、ドイツ語標準発音の音声・音韻記述の問題点の説明を試みる。その際重要なことは言語自体が変化を遂げている可能性と、標準発音規範の記述法自体が時代と共に移行し得ることの両面を念頭に置くことである。

第1章ではドイツにおけるドイツ語標準発音に関して概観する。第2章ではハレ大学で過去に出版された2つの発音辞典と、現在出版されている1つの発音辞典の出版経緯を紹介する。第3章と第4章ではドイツ語標準発音の音声・音韻記述において特に問題となる事項を詳細に取り上げ、一連のハレ大学の発音辞典による標準発音に関する記述の変化、特長、そして問題点を明確にする。さらに共時的観点も含めて他の発音辞典や先行研究との比較を踏まえ、現代の標準発音として適切な音声・音韻記述法を考察する。紙幅の関係上、二重母音と音節末尾音の/w/の2点を取り上げる。

なお本稿執筆の背景には、ハレ大学による発音辞典が *Duden 6* と比較すると、ほぼ同時期に出版が始まったにもかかわらず<sup>1)</sup>、これまで日本であまり注目されてこなかったという事情がある<sup>2)</sup>。このことは例えば現在日本で出版されている独和辞典において、発音指示にあたり準拠している文献として、前者の名が挙げられることが少ないことに顕著に現れている。前者は旧東独の、後者は旧西独の流れを持つ辞典であるため、政治的な状況等が背後にあるとも考えられるであろうし、前者では1982年以降長期に渡り改訂版等の出版がなかったことも<sup>3)</sup>、その原因となり得るであろう。しかし両者にはそれぞれの特長があり、記述上の差異もあるため、このような状況が続くことはドイツ語標準発音の実態をより詳細に考察し、ドイツ語の音声・音韻に関する研究を進めていく上で好ましいとは言えない。ハレ大学による発音辞典を大きく取り上げている日本で発表された先行研究には例えば田中 (1968)、田中 (1970)、馬場 (1975)、そして信貴 (1984) があるが、出版年代から分かる通り古いものであり、筆者が把握している限りでは最新版の DAWB をテーマとして大きく取り上げる先行研究が存在しない状況である<sup>4)</sup>。

ハレ大学が約30年ぶりに新たな辞典を出版してから長い時間が経過しない内に本稿が執筆されることにより、日本でのハレ大学による発音辞典への関心の高まりに微力ながら貢献できれば幸いである。

### 1. ドイツにおけるドイツ語標準発音

現在ドイツ連邦共和国では標準発音が規範として成立しているが、これが成立するに至るまで

には長い道のりがあった。標準的とされる言語の形式は国家における精神的、文化的、ならびに政治的中心地を基準として定められることが多い。だがドイツにはこのような地域が存在しなかったため、何をもって標準的な発音とするかの基準の制定が困難を呈したからである。そんな中、職業的な理由により統一化が図られてきた舞台での発音を標準的とする見解が広まり、1898年にテオドーア・ズィープス (Theodor Siebs) による『ドイツ語舞台発音 (Deutsche Bühnenaussprache)』が出版された。それ以来長期に渡り、舞台発音は実際の話言葉の実態を反映していなかったにもかかわらず、標準発音の規範として長く効力を持ち続け、『ドイツ舞台発音』はタイトルを変えながらも1969年の第19版まで出版され続けた (DAWB (2010: 8-10))。

そのような舞台発音や発音への過度の精密さの要求から脱却し、現実的かつ標準的な発音の体系化を目指すことが近年のドイツにおける標準発音の規範化の目的であったと言える。そして現在において標準発音とは、「超地域的で、地方的な影響を受けていない変種 (Rues et al. (2009: 21))」で、「各母語話者により理解可能であり、よく機能し、意思疎通に便利なのが証明されて (DAWB (2010: 6))」おり、「(発音) 辞書に記載されている (村田 (2013: 73))」形式として成立している。政府による取り決めにより公式に定められ、学校や公的な文書のやりとりに対して拘束力を持つドイツ語の正書法規範 (Rechtschreibungnorm) とは異なり、標準発音規範 (Aussprachenorm) はこのようであれば好ましいという特性を持つ段階にある (Hirschfeld/Stock (2007: 13))。それゆえ発音辞典間では音韻解釈や発音表記法に異同が見られ、標準として規定されている体系の確立は必ずしも一義的ではない。しかし発音上の欠陥に対する規制はあり、例えばラジオ・テレビ放送では話者による発音の選択や発音の正当な評価は取り締まられている (Hirschfeld/Stock (2007: 13))。

## 2. ハレ大学の3つの発音辞典

ハレ大学では1905年に朗読術の講師職が配置されて以来、人間の発話や発話を通じてのコミュニケーションに関する学問である発話学 (Sprechwissenschaft) が発展する基盤が整ってきた (Krech (1999: 21))。この発話学を独立した学問的分野として確立したハンス・クレヒ (Hans Krech) が研究の重点を置いていた音声学の中で、1950年代に標準発音分野における体系的な研究がハレ大学で始められ、クレヒの構想に従って広範な音声学的分析に基づきWDA (1964) が作られた (Krech (1999: 27-29))。WDA (1964) は「約半世紀前に作成されそれ以来ほぼ変更されることなく保たれてきた、比較的はっきりとした発音が求められる発話状況においてさえ、もうほぼ実現され得ない (WDA (1964: 5-6))」発音規則を見直すことを目的としており、調音の過剰な精密さがコミュニケーションの妨げになるとも述べている (WDA (1964: 6))。つまり通常の話言葉での発話の実態 (Sprechwirklichkeit) への対応が、ハレ大学の発音辞典の原点なのである。WDAは第4版まで改定され、1982年に新たなタイトルでGWDAが、さらにその後約30年が経過した後にDAWBが出版された。DAWBは以前に確立された構想を、現代に適応可能にするために進展させた。例えば異なる状況的条件下での標準発音の使用について非常に詳細な助言を与える等、社会音声学的視点にも基づいて編纂されている点が、DAWBにおいて特に刷新的である (DAWB (2010: 15), *Sprecher. info* (2011: 6))。



## 3. 二重母音の後半部の表記法

各発音辞典とHIPAにおける3種の二重母音の表記法を表に示す。3種の二重母音とは代表的な綴り字が<ei/ey/ai/ay>である二重母音、<au>である二重母音、そして<eu/äu>である二重母音である。

	WDA (1964) (1969-1974)		GWDA (1982)	DAWB (2010)	Duden 6 (2005)	HIPA (2011)
ei/ey/ai/ay	[ae]	[ <u>ae</u> ]	[ <u>ae</u> ]	[aɛ]	[ <u>ai</u> ]	[ar]
au	[ao]	[ <u>ao</u> ]	[ <u>ao</u> ]	[aʊ]	[ <u>au</u> ]	[au]
eu/äu	[ɔø]	[ <u>ɔø</u> ]	[ <u>ɔø</u> ]	[ɔœ]	[ <u>ɔy</u> ]	[ɔr]

表：各二重母音の綴りとそれに対応する発音記号の選択法

いずれの二重母音の前半部もそれぞれ同じ母音、つまり<ei/ey/ai/ay>と<au>では非円唇中舌広母音[a], <eu/äu>では円唇後舌半広弛み母音[ɔ]により表記されているが、後半部には4種の異なる母音を与えられている。その後半部について見ると、ハレ大学の発音辞典では連結記号の有無は別とすると、WDA (1964 - 1974) とGWDA (1982) は非円唇前舌半狭張り母音[e], 円唇後舌半狭張り母音[o], 円唇前舌半狭張り母音[ø]という同一の記号を使用しているが、DAWB (2010) は非円唇前舌半広弛み母音[ɛ], 円唇後舌半広弛み母音[ɔ], 円唇前舌半広弛み母音[œ]を用いている。すなわちハレ大学の辞典は後半部を以前は半狭張り母音と見なしていたが、現在ではそれらの半狭張り母音と対をなす半広弛み母音であると判断するようになったのである。

またDuden 6 (2005) は書記素に近い表記を選択しているが (Trouvain (2011: 87)), 音声的により正確な表記は[aj], [aʊ], [ɔy]である可能性を挙げており (Duden 6 (2005: 36, 注2)), この内[aj]と[aʊ]はHIPA (2011) において使用されている発音記号と一致する。なおHIPA (2011) の表記の最大の特徴は、代表的な綴りが<eu/äu>である二重母音の後半部を非円唇母音と見なしている点である。

続いてハレ大学の辞典の表記をDuden 6 (2005) とHIPA (2011) の表記と比較すると、全てのハレ大学の辞典が各二重母音の後半部に対して舌の位置がより低い母音を選択しており、最新版のDAWB (2010) が最も舌の位置を低く設定していることが分かる。このDAWB (2010) の選択に関してTrouvain (2011: 87) は、二重母音の後半部をDAWB (2010) が記すように広い母音として見なすことは不可解であり、二重母音は決してそれほど開いて終わることはなく、DAWB (2010) 付属のDVDの読み上げ例でもそのように発音されていないと述べ、疑問視している。これと関連してBecker (2012: 36) は、[ae]は強勢の弱い場合等に現れる[ar]が短縮された形であり、[ar]と[ae]が表記として共存していることは好ましくないことと見なし、適切な表記として[ar]を選択している。またVonficht (1954: 358) は[ae]を、北ドイツで間違いとして紛れ込んでいる純然たるぞんざいな発音と見なしている。これらの見解から、少なくともDAWB (2010) による各二重母音に対する表記が舌の位置を低く設定し過ぎてしていると判断できる。さらにWDA (1964 - 1974) とGWDA (1982) による[ae]も僅かながら舌の位置が低いと言えるが、[ao]に関しては妥当性がある。なぜなら[u]の舌の位置と唇の形状が[o]に近付くことがあり (栢田 (2006: 51)), 当該二重母音の後半部の舌の位置が[o]の辺りで発音されることも指摘されているからである (栢田 (2006: 60))。

最後に、上述した広く<eu/äu>により綴られる二重母音の後半部の円唇性に言及する。上述のようにHIPA (2011) のみがこれを非円唇母音と見なしているが、歴代のハレ大学の辞典やDuden 6 (2005) は舌の高さや張り・弛みに異同があるにせよ、円唇母音として表記している。Kleiner (2011: 87) は、DAWB (2010) による後半部の円唇母音としての表記は「歴史的に培われてきた記載法であるが、このような発音は(今日の)ドイツ語では例外的である。このことは„Tagesschau (ARD: Arbeitsgemeinschaft der öffentlich-rechtlichen Rundfunkanstalten der Bundesrepublik Deutschlandが放送している「きょうのニュース」)“において日々聴覚的に確認され得るだけでなく、(DAWB) 付属のDVDの模範発音者の発音においても計測できる」<sup>5)</sup>と述べ、円唇母音による表記を批判している。つまり円唇母音と見なす表記は今日のドイツ語に対する表記としては相応しくないという主張であるが、この主張は歴史言語学的観点から見ると妥当である。なぜなら中高ドイツ語 (Mittelhochdeutsch) において後半部が円唇母音であった二重母音/öü/ ([œy]<sup>6)</sup> が、新高ドイツ語 (Neuhochdeutsch) で異なる二重母音である[ɔɪ]になり、また中高ドイツ語の円唇長母音[y:]が、二重母音化 (Diphthongierung) により新高ドイツ語で[ɔɪ]になったのであるため (Nübling et al. (2010: 35)), 後半部を円唇母音として表記することは現代のドイツ語の表記としては相応しくないのである。

さらにこの後半部が非円唇母音であることをBecker (2012) とHirschfeld/Wallraff (2002) を参考に、当該二重母音と単母音の円唇前舌狭張り母音[y]と、強勢のない環境に現れるという共通点を持つ音質の比較的近い中舌母音[e]または曖昧母音[ə]との間の関係を観察することにより裏付けてみよう。まずheuer (「今年」) では当該二重母音に[e]が後続しているが、この二重母音の後半部と[e]の間のわたり音 (Gleitlaut) が[y]ではなく[i]であるため、Becker (2012: 36) は発音記号[ɔɪ]を支持している。これとは反対にBecker (2012: 36) は、[y:]に[ə]が後続するKühe („Kuh“の複数形「雌牛」) ではわたり音が[y]であると示している。このことをHirschfeld/Wallraff (2002: 495) は、[ə]に直接先行する母音である[y:]の影響で[ə]に円唇音化が起きると説明している。したがって[y]のような円唇母音の調音時とは異なり、当該二重母音の後半部の調音時では唇を丸めるには至らないと判断できるのである。つまりハレ大学の発音辞典とDuden 6による後半部の円唇性を認める見解よりも、HIPAによる非円唇母音の選択の方が適当であることが分かる。

#### 4. 音節末尾音である/ʁ/の表記法

/ʁ/はドイツ語において最も多くの変異体を示している (Ulbrich (1998: 213))。/ʁ/は子音であるが<sup>7)</sup>、母音として実現されるといふ/ʁ/の母音化 (Vokalisierung) も起こる (DAWB (2010: 86-87, 108), Duden 6 (2005: 21, 54))。この母音化という現象は/ʁ/が音節末尾音の時に起こり (例: Tür [ty:ʁ] 「ドア」), 音節頭音の時には起こらない (例: Türen ['ty:ʁən] „Tür“の複数形)。

実現形の多様さには/ʁ/の置かれる環境のみならず、発話状況により異なる調音の精密さ (Artikulationspräzision) が深く関係している。つまりどのような場で話されるのかにより発話速度や発音の明瞭さに差が生まれるため、/ʁ/の実現法も変化するのである。このことは/ʁ/の実現法以外にも当てはまることであり、広くは標準発音そのものが異なる調音の精密さによって段



階分けされることを示している。DAWB (2010:98-105) は例えば、改まった講演の場、ニュース原稿の読み上げ、もしくはトークショーにおける対話という場面ごとに、それぞれが非常に高度な調音の精密さ (sehr hohe Artikulationspräzision)、高度から中度の調音の精密さ (hohe bis mittlere Artikulationspräzision)、ならびに低度な調音の精密さ (verminderte Artikulationspräzision) により発音されると区分し、標準発音を3段階に分けている<sup>8)</sup>。

このように環境や調音の精密さにより /ʁ/ の実現法は異なっている。以下では通時的な視点による考察も加え、/ʁ/ の実現法や表記法がどのような変容を遂げているかをハレ大学の辞典を中心に探っていこう。なお上でも少しく言及した通り、/ʁ/ が音節頭音である場合には子音として実現されることが大半であるため以下では音節末尾音である場合のみを扱うものとし、その中でも特に実現法や表記法に争いのある2つの環境を取り上げる。その環境とは強勢のない接辞の場合を除く短母音の後と、強勢のない接頭辞内である。

#### 4. 1. 強勢のない接辞の場合を除く短母音の後の /ʁ/ (例: Herz 「心臓」, Wirt 「主人」)

WDA (1964-1974) はこの環境の /ʁ/ を、子音として実現されると記している (例: Wirt [vɪrt])。しかし上述のように標準発音を段階分けしている GWDA (1982) と DAWB (2010) では子音としての実現のみならず、発話速度が速まり、調音の精密さが低くなるにつれて、標準発音において /ʁ/ の母音化や (例: Wort [vɔʁt] 「語」 (DAWB (2010:108))), /ʁ/ が脱落し先行母音の弛み短母音が引き延ばされる代償延長 (Ersatzdehnung) が起こることを認めている (例: Wort [vɔ:t] (DAWB (2010:108))). また DAWB (2010) はこの環境の /ʁ/ の摩擦音における噪音部を相当弱いと見なし、発音記号として [ʁ̥] という小字を使用しており<sup>9)</sup>, *Sprecher. info* (2011:4) ではこの [ʁ̥] を「強く弱化した摩擦音の R (stark reduziertes Reibe-R)」と呼んでいる。つまり子音として実現する場合にも、当該 /ʁ/ の子音性は非常に弱いと判断しているのである。

このようにハレ大学の辞典の記述を通時的に見ると、母音として実現することを認める傾向が高まっていくことが分かる。現に Ulbrich と Graf/Meißner による音響音声学的実験の結果も、1966年に比べ1996年では母音化された実現形の出現が約3倍に増え、/ʁ/ の脱落に至っては約7倍に増加していることを示している (Ulbrich (1998:216))。すなわち単に辞典の記述法が変わったのではなく、実際に発音そのものにも通時的変容が見られるのである。また *Duden 6* もこの環境の /ʁ/ の母音化を容認しており、標準発音内で初めてこれを認めたのは第4版であるが (*Duden 6* (2000:21, 54)), 標準発音外の日常発音 (Umgangslautung) としてはすでに初版で容認している (*Duden 6* (1962:44))。しかし最新版の第6版においても各索引では子音としての実現形のみを与えており、解説部で母音化が実現することを解説するにとどまっている (*Duden 6* (2005:21, 54))。なお HIPA (2011:87-89) はこの環境での子音の実現形には一切触れておらず、『北風と太陽』の発音表記を含めこの環境の /ʁ/ を全て母音としての実現形として表記している。

#### 4. 2. 強勢のない接頭辞内における /ʁ/ (例: Erfolg 「成功」, Verlust 「喪失」)

WDA (1964-1974) はこの環境の /ʁ/ が母音化すると見なしているが、/ʁ/ を斜字体で示すこ

とにより子音としての実現形を完全には排除していない(例: Erfolg [er'fɔlk])。なおWDA (1964-1974)では接尾辞<er>においても斜字体による表記[ər]が用いられているように、[ɐ]や[e]という記号自体が使用されていない(例: Futter ['futər]「餌」)。それに対してGWDA (1982: 53-54)は最も明瞭な標準発音段階においても、強勢のない接頭辞内の<er>が母音化し[e]として実現されると判断し、接尾辞との差異をなくしている(例: Erfolg [e'fɔlk], Futter ['fute])。このGWDA (1982)の方針はDAWB (2010)に継承されている<sup>10)</sup>。すなわちハレ大学の発音辞典は通時的に、強勢のない接頭辞内における/ɐ/が母音化することを容認する傾向を強め、さらには<er>が[e]として実現するという発話速度のより速い表記を選択するようになってきているのである<sup>11)</sup>。

基本的にDuden 6はWDA (1964-1974)のように、強勢のない接頭辞内における/ɐ/が単独で母音化するという表記を選択しているが(例: Erfolg [eɣ'fɔlk] (Duden 6 (2005))), 第3版では明瞭性の少ない発音において[eɣ]の代わりに[e]が発音され得ると述べている(例: Verlust [fe'lʊst] (Duden 6 (1990: 48)))。

以上のように強勢のない接頭辞内の<er>が、[e]として実現されると指摘されていることが確認できたが、この環境における[e]という実現形を誤りと見なす見解も存在している(『ドイツ言語学辞典』(1994: 803f), 柘田 (2006: 66))。GWDA (1982)やDAWB (2010)が十分に参照されていないために、このような見解が示された可能性もあり得よう。

#### 4.3. まとめ

これまで考察してきたように強勢のない接辞の場合を除く短母音の後の/ɐ/と、強勢のない接頭辞内における/ɐ/では、/ɐ/が複数の方法で実現され得る。このような場合には標準発音内で可能な実現形を各索引で併記するという方針の採用が、好ましいのではなからうか(例: Wort [vɔʁt, vœʁt], Erfolg [eɐ'fɔlk, e'fɔlk])。当然、現実に運用されている言語形式を広く取り入れようとするあまり、過度に記述主義に偏ることは問題であるが、/ɐ/のように多様な実現形が現れることが明らかである場合には、本稿の提案のように2つの実現形の併記には弊害よりも有効性があると言えよう。

なお/ɐ/の実現法の複雑さと表記法という点で最後に1つ言及しておきたい。それは第1音節に強勢があり、語末が<ert>であるという、同じ条件にある2音節で構成される固有名詞(姓と男名)、例えばAlbert, Ebert, Gumpert, Lambert, ならびにRobertにおける/ɐ/に対して、DAWB (2010)もDuden 6 (2005)もAlbert, Lambert, そしてRobertには子音としての発音記号(前者では[ɐ], 後者では[r])を与えているが、EbertとGumpertでは<er>が母音化されることを表す[e]を記している。なぜこのような差異がそれぞれの固有名詞の表記で生まれるのかは疑問である。また上述のように両辞典はAlbertには子音としての発音記号を付しているが、Albersには[e]を与えている。後続子音の違いにより表記を分ける必要性はどれだけあるのであろうか<sup>12)</sup>。このような場合にも複数の実現形の併記が有効であると提案したい(例: Albert ['albɛʁt, 'albet])。

#### 5. おわりに

本稿で扱った2つの音声・音韻記述を見ても標準発音とされる形式が多様であるため、ドイツ



語の音声・音韻を扱う上では共時的・通時的な視点からあらゆる標準発音体系の可能性を探るべきことを改めて指摘しておきたい。なお本稿で扱っていない音声・音韻記述は別の機に取り上げたい。

#### 参 考 文 献

- Becker, Thomas. 2012. *Einführung in die Phonetik und Phonologie des Deutschen*. Darmstadt. WBG.
- DAWB. Krech, Eva-Maria/Stock, Eberhard/Hirschfeld, Ursula/Anders, Lutz-Christian (Hrsg.). 2010. *Deutsches Aussprachewörterbuch*. Berlin/New York. Walter de Gruyter.
- Duden 6. Duden. *Aussprachewörterbuch*. 6. 1962. 1990<sup>3</sup>. 2000<sup>4</sup>. 2005<sup>6</sup>. Mannheim. Bibliographisches Institut.
- GWDA. Krech, Eva-Maria/Kurka, Eduard/Stelzig, Helmut/Stock, Eberhard/Stölzer, Ursula/Teske, Rudi (Hrsg.). 1982. *Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache*. Leipzig. VEB Bibliographisches Institut.
- HIPA. The International Phonetic Association. 2011. *Handbook of the International Phonetic Association*. New York/Melbourne/Madrid/Cape Town/Singapore/São Paulo/Delhi/Dubai/Tokyo. Cambridge University.
- Hirschfeld, Ursula/Wallraff, Uta. 2002. „Untersuchungen zum Schwa im Deutschen.“ Braun, Angelika/Masthoff, Herbert (Hrsg.). *Phonetics and its applications*. Wiesbaden. Franz Steiner. 493-505.
- Hirschfeld, Ursula/Stock, Eberhard. 2007. „Aussprachewörterbuch und DaF-Unterricht.“ *Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht*. 12: 2. 2007. 1-20.  
[http://zif.spz.tu-darmstadt.de/jg-12-2/docs/Hirschfeld\\_Stock.pdf](http://zif.spz.tu-darmstadt.de/jg-12-2/docs/Hirschfeld_Stock.pdf) (13.09.2013)
- Kleiner, Stefan. 2011. Rezension zum „Eva-Maria et al. 2009. Deutsches Aussprachewörterbuch. Berlin/New York. Walter de Gruyter.“ *Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik*. Bd. 78. H. 1. 85-91.
- Krech, Eva-Maria. 1999. „Sprechwissenschaft an der Universität Halle - Entwicklung und Perspektiven.“ Krech, Eva-Maria/Stock, Eberhard (Hrsg.). *Sprechwissenschaft - zu Geschichte und Gegenwart: Festschrift zum 90jährigen Bestehen von Sprechwissenschaft/Sprecherziehung an der Universität Halle. Hallesche Schriften zur Sprechwissenschaft und Phonetik*. Bd. 3. Frankfurt am Main/Berlin/Bern/Bruxelles/New York/Oxford/Wien. Peter Lang. 21-39.
- Nübling, Damaris/Dammel, Antie/Duke, Janet/Szczepaniak, Renate. 2010<sup>3</sup>. *Historische Sprachwissenschaft des Deutschen*. Tübingen. Narr Francke Attempto.
- Rues, Beate/Redecker, Beate/Koch, Evelyn/Wallraff, Uta/Simpson, Adrian Paul. 2009<sup>2</sup>. *Phonetische Transkription des Deutschen. Ein Arbeitsbuch*. Tübingen. Narr Francke Attempto.

- Sprecher. info*. 2011. Prof. Eva-Maria Krech.  
<http://www.sprecher.info/interviews/142-juli-2011-pref-eva-maria-krech> (13.09.2013)
- Szulc, Aleksander. 1987. *Historische Sprachwissenschaft des Deutschen*. Tübingen. Niemeyer.
- Trouvain, Jürgen. 2011. Rezension zum „Eva-Maria et al. 2009. Deutsches Aussprachewörterbuch. Berlin/New York. Walter de Gruyter.“ *Zeitschrift für Interkulturellen Fremdsprachenunterricht*. 16: 1. 2011. 86-91.  
<http://zif.spz.tu-darmstadt.de/jg-16-1/beitrag/Krechetal.pdf> (13.09.2013)
- Ulbrich, Horst. 1972. *Instrumentalphonetisch-auditive R-Untersuchungen im Deutschen*. Berlin. Akademie.
- Ulbrich, Horst. 1998. „Anmerkungen zur Transkription und Kodifikation der deutschen r-Allophone.“ Bose, Ines/Biege, Angela (Hrsg.). *Theorie und Empirie in der Sprechwissenschaft. Festschrift zum 65. Geburtstag von Eberhard Stock*. Hanau/Halle. W. Dausien. 213-223.
- Vonficht, Fritz. 1954. „Bemerkungen zur deutschen Bühnenaussprache.“ *Zeitschrift für Phonetik und allgemeine Sprachwissenschaft*. Jg. 8. (Nchd). New York. Johnson Reprint. 357-365.
- WDA. Krech, Hans/Krech, Eva-Maria/Kurka, Eduard/Stelzig, Helmut/Stock, Eberhard/Stölzer, Ursula/Teske, Rudi (Hrsg.). 1964. 1969<sup>2</sup>. 1971<sup>3</sup>. 1974<sup>4</sup>. *Wörterbuch der deutschen Aussprache*. Leipzig. VEB Bibliographisches Institut.
- 窪 蘭晴夫 2000. 「最適性理論の課題」『音声研究 第4巻第3号』（日本音声学会）36 - 39.
- 信 貴辰喜（書評）1984. „Großes Wörterbuch der deutschen Aussprache. Herausgegeben von einem Autorenkollektiv. Hauptverantwortlich für die Bearbeitung: Ursula Stötzer.“『ドイツ文学 第72号』（日本独文学会）150 - 156.
- 田中宏幸 1968. 「一般ドイツ語標準発音 - ライプチヒ版発音辞典の特色 - 」『金沢大学教養部論集人文科学 第6号』（金沢大学教養部）137 - 164.
- 田中宏幸 1970. 「緩和された標準発音 ジープス発音辞典の改訂とドイツ語規範発音の最近の成果」『金沢大学教養部論集人文科学 第8号』（金沢大学教養部）45 - 56.
- 『ドイツ言語学辞典』1994. 紀伊国屋書店
- 新倉真矢子 2005. 「日常語発音の縮約における規則と制約」『ドイツ文学 第127号』（日本独文学会）14 - 29.
- 馬場義彦（書評）1975. 「東西両ドイツの『ドイツ語発音辞典』の新しい版」『東京経済大学人文自然科学論集 No. 40』（東京経済大学人文自然科学論集編集委員会）175 - 180.
- 柘田義一 2006. 『発音・綴り字 ドイツ語文法シリーズ8』大学書林
- 村田優子 2013. 「第18回ドイツ語教授法ゼミナール報告」『ドイツ文学別冊 2013年秋号』（日本独文学会）71 - 75.



## 注

- 1) ハレ大学による最新の発音辞典はDAWBであるが、1964年にその前身とされるWDAが出版された。Duden 6においては1962年に第1版が出版された。つまりハレ大学による辞典もDuden 6も、50年程の歴史を持っているのである。
- 2) *Sprecher. info* (2011 : 7) では、ドイツにおいてもDuden 6の方が広く利用されていると言われている。
- 3) ハレ大学は1982年にGWDAを出版後、GWDAの改訂を行わずにいたが、2009年にDAWBをGWDAの後身として出版した。なお本稿ではDAWBの出版年を2010年と記すが、2009年に出版されたものはハードカバー版であり、本稿で使用している仮綴じ版の出版が1年後の2010年であるためである。
- 4) 例えばKleiner (2011) とTrouvain (2011) のように、海外ではDAWBの書評が発表されている。
- 5) ( ) 内は筆者による補足である。
- 6) 二重母音/öü/をIPAでは[œy]と表記することができる。またSzulc (1987 : 116) は/öü/を/öy/と記している。このように/öü/の表記法にはいくつかの種類がある。
- 7) ドイツの標準発音では口蓋垂摩擦音[ʁ]が最も広く使われている子音としての異音であるため、本稿ではこれをR音を代表する記号として使用する。この他に子音としての異音には、口蓋垂ふるえ音[r̥]や舌尖ふるえ音[r̥]が存在している。これらの異音は自由異音 (freies Allophon) の関係にある。なおDAWB (2010 : 30), GWDA (1982 : 52), ならびにWDA (1974 : 49) が摩擦音のR音の調音点を、口蓋垂ではなく軟口蓋と見なしていることには首肯しかねる。DAWB (2010 : 30) は摩擦音のR音の発音記号を、本来は[y]であると解釈している。
- 8) つまりいずれの調音の精密さに該当する発音も標準発音であるが、文法を普遍的な制約の体系と見なし、言語体系間の相違や言語の変容を制約の序列の差異と捉える最適性理論 (Optimality Theory) の観点から見ると (窪蘭 (2000 : 36)), 各調音の精密さに属する標準発音間の差異は、同一の制約間での制約の優先順位が異なるために生じると説明できる。またこれに関連して新倉 (2005 : 14) は、ドイツ語の標準発音と日常語 (Umgangssprache) の発音の差異について、「用いられる『制約』自体は同じものであるが、それぞれの発話レベルでの制約の順序が異なる」と述べている。  
なおDAWBは各索引において、高度から中度の調音の精密さによる発音を記している。ハレ大学の発音辞典ですでにGWDAにおいて、このような標準発音の段階分けが採用されており、GWDA (1982 : 73 - 77) では、「(1) 朗読や、改まった、荘重な講演での発音」、「(2) 放送での原稿の読み上げや文学の散文の朗読時の発音」、「(3) 落ち着いた、事実に即した会話や、調音の緊張度が僅かな講演における発音」の3段階に標準発音が分けられている。そして(1)の段階を中心的な形式として辞典の記述に使用している。
- 9) DAWBは/ʁ/が音節頭音である場合には[ʁ]を使用している。なおGWDAでは摩擦音における噪音部が弱いことを示す記号の使用はなく、摩擦音のR、口蓋垂ふるえ音のR、ならびに舌尖ふるえ音のRを代表する表記としての[r̥]が音節末尾音の/ʁ/に対して使われており、/ʁ/が音節頭音である場合と区別されていない。つまりGWDAとDAWBでは音節末尾音の/ʁ/に子音としての実現形を示す表記を選択しているという点に相違はないが、子音性の強さという点においては大きな変更がなされたとと言える。
- 10) しかしGWDAと異なりDAWB (2010 : 103) は、調音の精密さが最も高い、最も明瞭な標準発音段階においては、強勢のない接頭辞内の/ʁ/が子音として実現され得ると述べている。
- 11) Rues et al. (2009 : 34) は、「接頭辞er-, ver-, zer-, her- は弱い母音とともに実現される。その時2つの母音をともなうより長い型と、より速い発話において生じるより短い型が実現可能である」と述べ、「ver [fɛɹ]または[fe]」という例を挙げている。このように同一環境における<er>に対して、[ɛɹ] (もしくは[ɛʁ]) と[ɛ] ([æɹ]や[æɹ])と解釈することが可能という双方の実現を容認する見解が存在するが、この立場に立つことは[ɛ]と曖昧母音[ə]が異音の関係にあるということの容認につながると言えるだろう。ドイツ語標準発音における曖昧母音の立場は広く議論されている。詳しくは例えばHirschfeld/Wallraff (2002) を参照されたい。
- 12) Ulbrich (1972 : 108) はアナウンサーの発音調査結果において、<ers>では<er>が100%の割合で母音化されるが、<ert>で<er>が母音化する割合は85.6%であると示している。両辞典がこのような調査結果に基づき、一部の<ert>で終わる固有名詞に子音としての実現形を記していると仮に解釈したとしても、両辞典がともに母音化されると記載しているBayern (地名), Ebern (地名), およびPommern (地名) における<ern>が、Ulbrich (1972 : 108) によると76.3%しか母音化されないという結果であるため、両辞典がこのような調査結果を反映させようとしているのではないかという仮説には説得力がないことが分かる。なお固有名詞としてのAlbernはDuden 6にしか記載がないが、母音化を表す表記である[ˈalbɛn]と記されている。